

# 文法史研究としての副詞研究

川瀬卓（白百合女子大学）

skawase@shirayuri.ac.jp

## 1. はじめに

### 本発表の目的

- 文法変化の問題を考えるうえで副詞が様々な知見をもたらしているものであることを示す。
- また、あわせて本パネルセッションにおける各発表との関係を示す。

### 副詞と文法変化

- 形容詞・形容動詞と同質（あるいは連続的）な内容的意味を表す情態副詞ではなく、文法的意味を表す程度副詞、陳述副詞に関わる歴史変化が中心的な課題となる。
    - ある言語形式がどのように程度副詞に変化するのか、陳述副詞に変化するのか。
    - それらの文法的意味がどのように変化するか。副詞内部での変化だけでなく、副詞から感動詞への変化なども注目される。
  - 本発表では、副詞の文法変化を捉えるうえで必要・有効な観点をいくつかとりあげる。
    - 2節では形態と意味変化の関係、副詞の構成要素といった語構成的な側面に注目する。
    - 3節では副詞の文法変化が起きる統語的環境として連体修飾構造に注目する。
    - 4節では副詞の感動詞化における語用論的要因に注目する。
- 2節と3節は林発表と関連する。4節では語用論的観点だけでなく、出現位置という統語的条件にも言及するが、その点、川村発表、川島発表（前半）と関連する。
- なお、2節の一部と3節は川瀬（2024b）の一部を元に加筆修正を加えたものである。

## 2. 語構成的な観点

### 形態と意味変化—語尾「に」「と」の脱落—

- 副詞には決まった形はないものの、副詞らしい形として「—に／と」や重複形がある。早くから、意味・機能の変化に伴って、語尾「に」「と」が脱落する傾向が指摘されてきたが（濱田 1955）、この点はまだ追求すべき余地が残されている。例えば、「に」の有無の違いという点に関しても、「たしか（に）」「多分（に）」などは「に」の有無によって意味用法が異なるが、「相当（に）」「大変（に）」などの「に」の有無は（おそらく）文体的な違いであるし、「だいぶ」「たいそう」「随分」などは「に」が伴わない形のみになっている。また、漢語副詞については、鳴海（2014）が、近世までの漢語副詞においてはむしろφが基本である可能性を指摘している点や、「自然」のように「自然に」→「自然φ」→「自然と」のような経緯をたどったものもあることなどを指摘しており、一概に「—に／と」が基本とは言いきれないことにも注意が必要である。

### 構成要素への着目

- 副詞には複数の要素が結合して出来上がっているものも多い。それらの構成要素に注目し、

構成要素自体の変遷との関連も見すえつつ考察することで、さまざまな事象との関連において、個々の副詞の歴史も位置づけることが可能になるだろう。例えば、現代語には、古代語で生産的であった指示副詞を素材とするものが数多く存在する。「とかく」「とにかく」「ともかく(も)」「とても」などの「と～かく～」の表現に由来するもの、「さぞ」「さも」「さほど」など「さ」に由来するものなどがそれである。これらは傾向を表す表現と結びつくもの(「とかく」)、談話の展開に関わるもの(「とにかく」「ともかく」)、認識的なモダリティと親和性の高いもの(「さぞ」)、比喩との結びつきが強いもの(「さも」)、否定と呼応するもの(「さほど」)など、それぞれに個性の異なる文法的意味を表す副詞となっている。これらは、岡崎(2010)で明らかにされたような指示詞体系の変遷(「かく」「さ」の2系列から「こ」「そ」「あ」の3体系へ)の中で、複合的な形で副詞化したものが残存、独自に発達したものであると考えられる。元の素材である“親”表現との関係において、どのように発生し、それがどのように慣用化され、固定化し、あるいは歴史的に展開していったのかといったことが課題となる。

ここでは指示副詞についてのみ述べたが、「さぞ」「さも」「さほど」の後部要素である助詞、形式名詞も視野に入れる必要がある。

### 3. 連体修飾構造と文法変化

- 連体修飾は副詞の例外的現象のように扱われてきたが、文法変化を考えるうえで重要な統語的環境である。

#### 連体修飾構造における量副詞化

- 副詞は連用修飾するだけでなく、「少しの間」「かなりの人ばかり」「全くの嘘」など連体修飾することがよく知られている。とくに量を表す副詞は連体修飾が可能な場合が多い。小柳(2019)は連用修飾機能を持たない名詞が副詞化する統語的環境の一つとして、「X+の」という連体修飾句をあげる。古典語の名詞「露」は「つゆ(名詞)+の+名詞」という構造(例「露の命」)において「つゆ(露)」にわずかな量という量的意味が看取され、「つゆ(副詞)+の+名詞」のように量副詞と読み替えられて、連体修飾から離れた連用修飾語になったという。量的意味から程度的意味へ(量副詞から程度副詞へ)という意味変化の類型については鳴海(2015)で論じられているが、連体修飾構造という統語的環境に注目することで、量的意味の発生や、その後の程度的意味の発生についてより理解が深まると思われる。

#### 「相当」の場合

- 一例として「相当」の副詞化を見つめる。鳴海(2015)によれば、〈対応する〉といった意味を表す動詞「相当す」の漢字文献以外の例は中世前期から見られ、中世末期以降に、量を表すと思われる例として「相当の」「相当に」が現れる。また、近代以降、「相当の」の多用、「相当に」の増加、語尾「に」のない「相当 φ」の例の出現が見られ、意味的には量ではなく程度を表す例も現れるようになるという。統語的側面に注目すると、量的意味を表すものとしてまず「相当の」という連体修飾から量的意味が看取される点が注意される。鳴海の調査における「相当の」「相当に」の初出例はそれぞれ以下の例である。  
(1) a. しかりといへども、たゞ一つのわづかなる御をんにたいしても、さうたうの御れい

を申たつとみ奉る事かなはずとわきまへ、さんげし奉る也（こんてむつすむん地  
[1610] 巻3・鳴海 2015：145）

- b. ハテ、俺が内に居れば、家賃から米代木代、相当に銭をやらにゃ掛ける者が無い。  
（韓人漢文手管始 [1789]・鳴海 2015：145）

ただし、全ての漢語が必ず連体修飾経由で連用修飾語になるわけではない。鳴海（2015）によれば、中古から見られる「随分」の場合は、原義の〈分相応〉から離れた量的意味を表すものとして「随分に」のほうがやや先に見られるようである。

#### 程度量的意味のタイプ（量・時間量・程度）と統語的位置

- 深津（2022）は様態を表す「ちっと」「そっと」の程度副詞化において、元の語彙の意味が関連して、「量」「時間量」「程度」の獲得の順序と、統語的性質の獲得の順序が相関することを示している。やや簡略化してまとめると以下の通り（実際は述語での使用などもあるが省略する）。
  - 動作が軽度であることを表す様態副詞「ちっと」は、その意味に含意される「程度」が前景化し、程度副詞化する。その後、「量」を表すようになり、さらに「ちっと+の+名詞（時間名詞）」という連体修飾句でも用いられるようになって「時間量」も表すようになる。
  - 動きや変化が素早いことを表す様態副詞「そっと」は、まず「そっと+の+時間名詞」において時間量を表すようになり、その統語的環境の中でさらに量や程度も表すようになった後に、程度的意味で連用修飾語としても使われるようになる。

#### 副詞と連体修飾の問題

- 連体修飾という環境において、量的意味との密接な関係があることを示した。一方で、もう一つ注意されるのは、連体修飾で用いられる副詞は量副詞には限られないということである。BCCWJを資料として副詞の連体修飾用法を調査した野田（2017）では、「程度・量の副詞」が多いが、「モダリティの副詞」（「せっかく」「もちろん」「まさか」など）、「評価の副詞」（「当然」「さすが」「あいにく」）にも連体での使用が見られることが示されている（ここでの副詞の種類名は野田が示しているものである）。これらの副詞の連体修飾についても視野に入れる必要があるだろう。
- 連体修飾構造への注目の重要性は、副助詞を中心に文法変化が起こる環境を考察する宮地（2020）でも示されている。小柳（2019）が「副詞の入り口」と述べたように、連体修飾構造は名詞の世界と副詞の世界を行き来する場所として、文法変化を考える際に注目すべき統語的環境である。

#### 4. 文法変化における語用論的要因—副詞の感動詞化—

- 「陳述副詞の中でも、文相当のものを導き出すような性質を持つものは、単独で文を成すような性質をも、比較的容易に獲得する。「どうぞ。」などは、「どうぞ、お入り下さい」の省略を言うより、すでに一つの感動詞と認めてよいかも知れない。特にこのような応接・挨拶の言葉は高速度に慣用化され、応答詞に近接し感動詞にまぎれ込む」（渡辺 1980：201）

##### 「ちよっと」の感動詞化

- 深津（2018）は、量・程度の小ささから派生して行為指示における配慮を示す副詞「ちよ

っと」が、聞き手の注意を引く機能を持つ呼びかけの感動詞になることを論じている。(2a)のように行為指示における配慮を示す副詞「ちょっと」は、聞き手への配慮のために(2b,c)のように行為指示が表示されず、「ちょっと」自体が行為指示を果たす語用論的使用(「ちょっと+φ」)を経て、(2d)のような呼びかけの感動詞になったとする。

- (2) a. ちよつと呼んで来てくだされ (冥途の飛脚 [1711] 下・深津 2018 : 221)  
 b. 「忝い御情此上はあこぎながら、とても事に今愛で、ちよつと△」とすがりしを (堀川波鼓 [1707] 上・深津 2018b : 223)  
 c. 「急に御目ニ懸りたい。ちよつと△」 (聞上手 [1773] 12オ・深津 2018 : 229)  
 d. 夏「一寸小金さん何だへ来たのかへ」 (春色恋廻染分解 [1860-1862] 初編 34ウ・深津 2018 : 231)

深津は「ちょっと」の感動詞化の意味的条件、統語的条件を次のように示している。まず意味的には、「ちょっと+φ」の中でも、相手呼び出す場面における(2c)のようなもの(〈呼び出し〉タイプ)は「呼ぶ」という点で呼びかけと意味的に連続する。次に統語的には、(2b,c)の出現位置は発話末であるが、とくに(2c)のような〈呼び出し〉タイプにおいては「ちょっと」が文として独立した形で一語文的に現れ、それは発話末である一方で文レベルでは頭に位置していることにもなる点で、呼びかけの感動詞に近い。これらの意味的、統語的な特徴が、発話冒頭で現れる呼びかけの感動詞「ちょっと」の成立につながったというわけである。

#### 「どうぞ」の感動詞化 (川瀬 2024a)

- 「どうぞ」も「どうぞお座りください」のような〈勧め〉を表す副詞として使われるだけでなく、「どうぞ」一語のみで応接場面における促し(部屋へ通す、椅子に座ってもらうなど)や、聞き手の許可願いに対して是とする応答をするなどの感動詞的使用が一般化している。「どうぞ」は近現代において行為指示の内容の変化(話し手利益の行為指示から聞き手利益の行為指示へ)が生じるが、聞き手利益の行為指示への変化と連動して、単独で一語文として発話される感動詞の使用が増加する。「どうぞ」の聞き手利益化は来客の応対のように、話し手・聞き手双方ともに相手への高い配慮が求められる場面で進んだと考えられるが、そうした場合には明示的な行為の指定を避けて、(3a)のように述語が非表示となることもしばしばある。こうした使用から(3b)のような感動詞的用法が発生し、定型的な表現の一つとして定着した。

- (3) a. 由「イエナニ 今日<sup>こんにち</sup>はモウ大きによろしうございます。御遠慮なさいませんで、どうぞこちらへ。(春色梅児誉美 [1832-1833] 3編巻8・川瀬 2024a : 79)  
 b. 「お入りなさい、一どなた」と、声をかけた。「居らしたのね」扉をあけて現れたのは、高崎であつた。「まあ珍しいこと！どうぞ」(宮本百合子・伸子・60N伸子 1924\_12008,7900・川瀬 2024a : 79-80)

#### 「どうも」の感動詞化 (川瀬 2023 : 第8章)

- 行為指示以外においても感動詞化のきっかけとなる述語非表示は生じうる。たとえば、感謝・謝罪の際の副詞としてだけでなく、出会いの挨拶としても用いられる「どうも」がある。「どうも」は、話し手の望ましくない事態が発生したことを強調的に示すものだったところから、(4a)のように文脈的に、相手への恐縮という対人的意味を表すものが現れ、さらに(4b)のように配慮を示すために述語非表示の例もしばしば見られるようになる。恐縮は

(4b)のように挨拶においてなされることも多い。そこから(4c)のように、恐縮という意味が薄れた単なる挨拶としての感動詞的使用もなされるようになったと思われる。

- (4) a. きぬ「ナニ一人で帰りますから。決して送りにはおよびません。併折角の吾儕が心。お役にはたゞずとも。この二品は何様なりと。宜やうにして下さいませトいふを止めて 幸「どうも夫じやア。吾儕の気が濟ない（毬唄三人娘 [1862-1865] 初編巻中・川瀬 2023 : 160)
- b. Senjitsu wa makoto ni o kamai môshimasen' dé dômo haya. (会話篇 [1873] 16・6・川瀬 2023 : 162)
- c. (倉)然り。まづ蚊屋のなかへはいりたまへ(継)ヤアどうも。今度ばかりは我輩も失敗したぞ。君達が来ないと。実に究迫を究める処だった(当世書生気質 [1885-1886] 第7回・川瀬 2023 : 164)

### 副詞の感動詞化の契機

- 副詞が感動詞化する際の一つのパターンとして、聞き手への配慮という語用論的要因による述語非表示がなされ、そこからさらに一語文的使用が見られるようになり、感動詞として定着するという流れがあげられる。もちろん、個々の形式ごとの事情の異なりも考慮する必要がある。「どうぞ」の場合は、客への応対という場面の特性も関与している。これは出会いの挨拶として用いられているとも言え、「どうも」と合わせて、挨拶における感動詞化の例と言えるだろう。
- 深津(2018)においては、出現位置(発話の中での位置)についても明示的に議論が展開されていた。文法変化を把握する際の、出現位置へ注目することの有効性については、接続詞(的表現)から応答表現への変化を論じる川村発表や、接続詞の成立について論じる川島発表などでも示される。

使用テキスト・コーパスは各文献が使用しているものに基づく。

### 参考文献

- 岡崎友子(2010)『日本語指示詞の歴史的研究』ひつじ書房／川瀬卓(2023)『副詞から見た日本語文法史』ひつじ書房／川瀬卓(2024a)「副詞「どうぞ」の歴史変化—変化の語用論的要因に注目して—」『日本語文法』24(1)／川瀬卓(2024b)「【テーマ解説】副詞」青木博史・小柳智一・高山善行(編)『日本語文法史研究7』ひつじ書房／工藤浩(2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店／小柳智一(2018)『文法変化の研究』くろしお出版／小柳智一(2019)「副詞の入り口—副詞と副詞化の条件—」森雄一・西村義樹・長谷川明香(編)『認知言語学を拓く』くろしお出版／鳴海伸一(2014)「漢語形容動詞・副詞の品詞性と用法変化—通時的観点からみた近現代の特徴—」新野直哉(編)『近現代日本語における新語・新用法の研究』国立国語研究所／鳴海伸一(2015)『日本語における漢語の変容の研究—副詞化を中心として—』ひつじ書房／野田春美(2017)「副詞+「の」による名詞修飾の諸相—書き言葉コーパス調査に基づいて—」森山卓郎・三宅知宏(編)『語彙論的統語論の新展開』くろしお出版／濱田敦(1955)「国語副詞の史的研究(2) あながちに」『人文研究』6(5)(濱田・井手・塚原(1991)所収)／濱田敦・井手至・塚原鉄雄(1991)『国語副詞の史的研究』新典社(増補版、2003年)／深津周太(2018)「副詞「ちょっと」の感動詞化—行為指示文脈における用法を契機として—」高田博行・小野寺典子・青木博史(編)『歴史語用論の方法』ひつじ書房／深津周太(2022)「様態副詞の程度副詞化—「ちっと／そっと」の対照から—」『静言論叢』5／宮地朝子(2020)「副助詞類の史的展開をどうみるか—これからの文法史研究—」『日本語文法』20(2)／渡辺実(1980)「感動詞」国語学会(編)『国語学大辞典』東京堂出版／渡辺実(編)(1983)『副用語の研究』明治書院

【付記】 本研究はJSPS 科研費(JP19K13198)の成果の一部である。